

古典派経済学の空間認識

—アダム・スミスの地代論を中心に—

藤 田 佳 久*

Spatial Recognition in Adam Smith's Rent Theory

Yoshihisa FUJITA

(1972年9月30日受理)

1. はじめに

最近における国土改造論や土地利用計画法などの政策上にその一端が示されるように、経済事象の空間的認識は近年一般化しつつあるようにみえる。このような動向は生産規模の拡大と技術革新を背景にしていちぢるしい伸びを示してきた昭和30年代以降の日本経済が、政策上においても直接対処せざるをえなくなるほど空間的な制約を受ける段階に到達したことを物語っている。それは具体的には、いわゆる都市地域と遠隔農村地域との間に引き起こされた所得格差が、より短期間に人口移動を促し、それが両地域のすみずみまで浸透した結果、いわゆる過疎過密現象が社会問題の前面にとりあげられるようになったからであり、またこのような背景の上に、とくに前者において土地という有限な供給量をめぐる需給の不均衡化から、いわゆる土地問題が急激にクローズアップされてきたからである。

このような諸問題は従来空間を取り扱ってきた地理学においても十分その課題とすることができ、しかし従来の地理学がこのような問題をどのように認識し対処してきたかという点については地理学の方法論の上からは限界があったといえるだろう。それは地理学、この場合に即していえば経済地理学がその空間をより具体的な地域として個別的に把握することを専らとし、グリーンハット (M. L. Greenhut)¹⁾ にそれらを物語であると言わせたように空間をより一般化する形で認識する方向を有していなかったからである。

一方、経済地理学を一分野として行する経済学においても地域経済学や空間経済学としてその研究分野が開拓され発展するようになったのはまだ最近のことである。それまでの経済学が空間的な認識を無視して展開してきた、とは戦後において空間を経済理論に組み込もうと努めてきたアイザード (W. Isard) によるそのような伝統的な経済学に対する批判であった²⁾。たしかに経済学の主流の中には少なくとも空間的な配慮を時間的な配慮ほどに論じた場合はほとんどなく、それゆえ早くも19世紀前半に農業立地論を樹立したフォン・チューネン (von Thünen)³⁾ や、そのあと工業立地論を展開したアルフレッド・ウェーバー (A. Weber)⁴⁾ の経済立地論は、そのような伝統的な経済学の主流からは必ずしも評価されず、並流視されてきた。それはチサム (M. Chisholm)⁵⁾ もいうように、これらの古典立地論がその方法論の上からも経済学の理論に組み込めない、一般化の困難な特殊かつ技巧的なものであり、それゆえ経済学との間に溝を有していたからである。

そしてこのような古典立地論に対する地理学側の評価も経済学における評価に負けぬほ

* 地理学研究室

ど厳しいものがあつた。すなわち、古典立地論のもつ演繹的方法に対する理解力の欠如と、それに関連して前提条件における自然条件の無視に対する感覚的な批判がつづけられてきた。

このような中でレッシュ (A. Lösch) ⁶⁾ によって空間的な要素を経済学の中に組み込む努力がなされ、それが戦後のアメリカにおける経済学の中に空間的な認識がとり入れられる基盤を形成し、アイザードなどによって地域経済学が成立し発展するようになった⁷⁾。そのさい彼はフォン・チューネンを地域経済学の創始者とし、それまで並流視されてきた経済立地論を正当化するための体系化を試みている。その中で空間的な認識を欠如しているとして、それまでの経済学を、とくにマーシャル (A. Marshall) の著書からの引用文をかかげることによってアングロサクソンの偏見として一蹴さえているのである⁸⁾。

それはそれまでの経済学がなぜに空間的な認識を欠いたかを問うことなしに、それまでの経済学に対する一方的な批判のようにもみえる。なぜなら、アイザードがアングロサクソンの偏見として引用したマーシャルの「経済学原理⁹⁾」においてはかなり精緻な経済地理的な記載がなされており、さらに空間を意識した原理が述べられているからである。そしてなによりもマーシャル自身がフォン・チューネンを「他の師匠にまさって愛していた」人物としている¹⁰⁾ ことについては十分注目されねばならないだろう。つまりこのことは従来の経済学がその基本原理として空間的な認識を一般化していなかったとはいえ、空間的な認識を欠如していたということにはならないことを示している。

また経済立地論の創始者として古典的立地論を展開したフォン・チューネンの理論が白紙の中から突然に出現してきたものであるとも考えられない。彼をつつんでいた背景にイギリスの古典経済学が存在していたことは彼自身がアダム・スミス (A. Smith) の名前をあげていることによっても明らかである¹¹⁾。

したがって経済学の主流がどのように空間を認識していたのか、またなぜそれが一つの大きなファクターとして位置づけられなかったのかについて検討することは、今後の経済地理学における空間認識を物語的でない水準で一般化していく上においてもきわめて意義あることだと考えられる。そこでまず古典立地論の創始者であるフォン・チューネンにも強い影響を与え、古典経済学の基盤を構築したアダム・スミスをとりあげ、古典経済学における空間認識がどのようなものであったかを検討することにする。それはまた経済学主流の原点における空間認識の状況を一つの基準として設定することにもなるであろう。このような視点での研究は数少なく¹²⁾、それゆえ今後も研究がすすめられるべきだと考える。以下アダム・スミスの「諸国民の富」をとりあげ、とくに地代論を中心として検討をすすめる。なおアダム・スミスの著書は大内兵衛・松川七郎の共訳書¹³⁾によったが、確認のために使用した原著書は Bohn's Standard Library の William Scott によって編まれた第6版のリプリント¹⁴⁾に依拠した。

2. アダム・スミス「諸国民の富」にみられる一般的な空間認識

アダム・スミスの「諸国民の富」(An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, 1776) はそれまでのマーカンティリズムとケネー (F. Quesnay) やチュルゴー (A. R. J. Turgot) に代表されるフィジオクラシーのあとを受け、流通面や農業面にとどまることなく、自然法に基いた市民社会のあり方とその価値法則を通して、初めて社会全体の構成を対象とした経済分析を行い、その一般性をあきらかにしようと試みた書である。シュムペーター (J. A. Schumpeter) はそれを偉業とたたえながら、分

析技術の上からは重商主義の域を出ないとして淡白に評価しているが¹⁵⁾、一般的にはブローグ (M. Blaug) が経済過程に対する鋭い洞察力という点¹⁶⁾を、またジャム (E. James) がアダム・スミスの経済学説が70年間の有効性をその後において保ちえた点¹⁷⁾を各々評価しているようにその意義はきわめて大きい。この著書は産業革命がまさに進行しはじめたイギリスにおいて、それまで残されていた中世的要素が大規模なエンクロージャによって一掃され始め、また生産規模も拡大しはじめ、家内工業的な企業の一部が機械による分業によって置換されていく過程の時代を背景として成立したものであり、したがって資本主義が成立しつつある中で、それのもつ自由な行動を大きな価値基盤とし、それまでのマーカントリシト的指向に反発して資本主義の原形的な考察がなされたものである。そのさいの体系化の基準として労働価値が設定され、つづくリカード (D. Ricardo)¹⁸⁾らとともに古典学派 (classical school) を代表するものとして位置づけられている。

アダム・スミスのこのような試みはその後リカード、マルクス (K. Marx)、マーシャルなどに受けつがれ、その後の経済学の発展にも大きく影響し、前にも述べたようにフォン・チューネンもその一人であった。またアダム・スミスが資本主義の原形を認識したという点で今日アダム・スミスへの回帰が言われるなど現在においても大きな存在価値を有している。わが国では明治時代の富国強兵、殖産興業政策に支えられて経世家のアダム・スミスの「国富論」として早くから知られ¹⁹⁾、その後も幾多の研究がなされてきた。

アダム・スミスは分析をすすめる上で、まず当時のイギリスのマニュファクチャー段階においてすすみつつあった分業に注目した。この分業そのものは技術の発展を促し、短時間に大量生産をもたらすものである一方、それは新しい交換価値としてのメカニズムを発生させるものとして認識された。そしてその上に価格分析をすすめ、この価格が当時のイギリスで定着しつつあった資本家、地主、労働者の取り分、すなわち利潤、地代、賃金という形で構成されるとして第一篇以下の基本的なフレームが構築されるのである。

少々前置きが長くなったが、では彼の著書の中で空間（この場合経済空間）はどのように認識されているだろうか。地代論にふれる前に一般的な記述の若干からそれを見てみよう。

もとより彼の論は資本、土地、労働の三部門への分配がいかなる機構で行なわれるかに重点を置いて展開されており、経済現象の空間性の認識についてはそれが表現されているとしても副次的な認識であることはいうまでもない。それは産業革命の開始期にあって新しく形成されつつある経済機構がそれに基づいた新しい空間構成をまだ十分にはもたらしはなかったであろうことを考慮すれば当然のことでもあろう。その意味において後に触れる地代論はかなり演繹的な側面を含みつつ論じられていることに注目せねばならない。

かくして基本的にはアダム・スミスが巻頭で述べているように「ある特定の国民の領土の地味、気候、および大きさがおよそどのような場合であろうとも、その国民の年々の供給が潤沢かまたは乏しいかはその特定の事態のもとでは、これら二つの事情（労働の質と量—筆者）に依存せざるをえないのである。²⁰⁾」に示される。すなわち、国民の生産活動の水準の高低はまさに労働力の量と質とにかかっているということで、およそその国をとりまく所与の条件としての自然環境そのものとは無縁であることを指摘している。このような認識は労働価値説にもとづいたものであり、このような前提条件の上に論を構築していく。このような構築方法はその後のフォン・チューネンによっても受けつがれており、内容的にも自然労賃の設定を試みている点では、アダム・スミスの枠内での展開がうかがわれる。

論の出発点となった分業についてはそれが「最高度の産業と文明とを享受している国々で最もすすんでいるのであって²¹⁾」、未開発状態の社会(a rude state of society²²⁾)ではなりたないものとしており、イギリスのような進歩した大国と未開発状態の国との間の異った社会の存在を認識した上での記述であることがまず示される。そして彼の論はイギリスのような大国を対象としてすすめられることになる。そしてそのさいに進歩した大国の場合においても「分業は市場の広さによって制限される²³⁾」として、市場の広がりが必要の大きさによって支えられていること、そのさい水運の便が市場をさらに拡大することを指摘している²⁴⁾。また「色々な職業は都会以外では営めない²⁵⁾」として都市と農村における機能分化の状態についてもふれている。このような形で都市と農村を認識しながらもその空間関係についてははっきり言及されるまでに至っていない。しかし両者の機能については第三編²⁶⁾において経済史的な視点から考察がすすめられている。そこでは都市と農村との有機的な連関が両者の相互的な発展をもたらしたことが明らかにされる。すなわち、まず農業生産力の上昇が余剰生産物を生み、都市の製造業や商業を成立発展させること、次いでこのような都市での製造業の発展が農業にも反映してその生産力を高めていくという両者の相互関連性が示されている。そのさいまた需要としての市場を拡大することによってそれぞれの生産力が上昇することについてもこれが両者の分業を支えるものとして述べられている。以上のような農村との規定関係にある都市以外に、歴史的な発展過程の中ではイタリアにみられたような交易上の要地に発達した別種の都市の存在についても指摘し、全体としては多くの都市がそのような類型の中でとりあげられている。都市をこのような概念の中でベーシックなものと同ベーシックなものに類別したのは興味深い。また農業についてもイギリスを基準として各国の歴史的な農業について考察がすすめられ、その中で各国の固有な歴史性、たとえば土地の相続制度の特異性をとりあげ、現状分析のさいの一要素としてとりあげようとしている。

このようにアダム・スミスが全体としては演繹的な構図をとりながらも、個々の段階では経済史的な考察も十分に行ない、各事象あるいは各地域の個別性に注目したことから経済理論そのものはかえってぼやけがちであった。それは彼の時代が来るべき資本主義の機構がその機能を十分に発揮するまでに至らなかった状況にあり、それが彼の中にそのままあらわれざるをえなかったからであろう。それゆえそのあとのリカードになって純粋な抽象化が可能になったということになる。

かくして個々の事象の分析において個別性が論じられる中で、若干なりともわれわれが認識できる経済地理的記述が含まれることになったのである。したがって、たとえば市場を広がりとして把握するという後のレッシュの基本的な原理に通ずる視点を有しながらも、それはすぐ具体的な記述の中に埋没しがちであったし、また都市と農村という二元的な事象を有機的にとらえ、両者の空間的な関係については市場である都市に対する近隣の農村の有利性を指摘しながらも、歴史的考察の記述の中に埋没しがちであった。このように全体としては彼の空間認識が原理として統一されたものでないことがわかる。しかしその空間認識の存在は個別的分析段階ではかなり認められるものであり、それが彼の中心的な原理に直接影響するまでには至らなかったとはいえ、副次的あるいは潜在的な原理として評価することができるだろう。

そこで次に彼の空間認識が最も表現されていると思われる地代論について検討してみよう。

3. アダム・スミスの地代論と空間認識

(1) アダム・スミスの地代

アダム・スミスの地代は利潤、労賃とともに実質価格を構成する要素としてとらえられている²⁷⁾。このような価格の三分割の概念はイギリスという具体的な歴史の場においてはじめて抽象化されたものであろう。彼の原理からいえばそれらの各要素は労働価値によって裏付けられたもの²⁸⁾でなくてはならないが、しかし地代に関しては必ずしもそれに従ってはいない。

彼は「土地の使用に対して支払われる価格と考えられる地代は、自然借地人がその土地の現実の諸事情のもとで支払いうる最高の価格である²⁹⁾」と地代の概念を示したあと、地代は土地改良に投資された資財の利子であるとは限られず、たとえば人間の手の加わっていない自然に生えているケルブの岩や、漁獲機会の多い海面についても成立するとしている³⁰⁾。このことはこれらの地代が彼のいう労働価値によって組み立てられないことを意味する。したがって彼の地代は独占価格によって生ずる概念ということになる³¹⁾。したがって、その地代はたとえば農業者が取得しえた生産量の大きさは無関係に形成されるものであり、農業者が支払いうる量に関して規定されるということになる。その結果彼のいうように賃銀と利潤は価格の原因であるが、地代はその結果において生ずるものとして性格づけられる³²⁾。このような地代の性格づけは彼が第一篇を通して地代を詳細にとりあげるまでに展開してきた所論とは明らかに矛盾することになる。このような矛盾もまた彼の理論化をめぐる現実との間の幅をもたらしたものであったろう。

かくして地代は農業労働とは直接の関係なく規定されるということである。まさに地代は土地をめぐる需給関係を通して形成されることになり、高島善哉³³⁾が指摘するようにむしろ効用の概念で把握されるべきものとなる。したがってこのことに関する限りのちに効用概念が本格的に成立するよりも一世紀前に先駆的な概念がその混沌とした状況の中で構成されたということになる。

(2) 地代の成立条件

このような地代がどのように成立するかについて、①常に地代を生ずる土地生産物の場合と、②ある時には地代を生じ、またある時には地代が生じない生産物の場合とに分けて考察をすすめている。前者の場合には「人間が他のすべての動物と同じようにその生活手段に比例して自然に増殖するものであるから、食物に対する需要はつねに多少とも存在する³⁴⁾」という前提の上に、土地はどんな位置にあっても食物を市場へ供給するのに必要な労働力を上回って多くの食物を生産する。したがってそこに生じた剰余はその労働に必要であった資財をその利潤とともに回収しても余りが生ずるとしている。そこに地主に対する地代が生みだされるというわけである。それに対して後者は食物以外の生産物について該当するとしている。すなわち原始状態のもとでは衣、住の材料を十分に供給することができるが、「改良された状態³⁵⁾」では衣・住よりも食の方をより多く供給する場合があり、そのため衣、住の材料が払底することにより、それらの需要の相対的増加に支えられて、その価値が高まり、地主に地代を与えることが可能になるというのである。

したがって、この後者を検討することによって地代の成立条件を把握することができ。そこで以下後者の場合について検討してみよう。

まず具体的には獣皮、羊毛、石材、木材などをあげ、これらはいずれもロンドンあるい

はフランダースの市場を見出すことによって地代が生じたとしている³⁶⁾。それは需要の増大にともなう市場圏の拡大がそのような原料生産地をつつみ込んでいくということによる。そのさいに若干の条件が示されている。たとえば石材の場合には「ロンドン近隣(neighborhood)に良好な採石場があればかなりの地代を生ずる。がスコットランドやウェルズの多くの地方ではそれは全然地代を生じない³⁷⁾」し、また建築用材についても、人口が濃密でかつ十分に耕作された国では大きな価値をもち、大きな地代を生ずるのに対して、北米やスコットランド高地地方のような遠隔地では通路が水運の便がないために木材の一部分である樹皮しか市場に送れない。しかしノルウェイなどの沿岸にある森林はイギリス市場と結合しやすく地代を生ずるに至っている例が述べられている³⁸⁾。ここでは未開発地域であっても市場との交通条件が良好ならば地代が成立しうる点に地代成立の条件が示されている。

かくして交通条件が問題となるが、元来石材や木材は重量があり、それゆえこの交通条件は輸送費の多少を述べていることになる。しかるに彼の輸送費の概念はあとにも触れるようにきわめて具体的であり、抽象化されたしかも独立した概念にまで止揚されていない。したがって彼は輸送費を次のような形で把握せざるをえなかった。すなわち「改良された国々においてさえ、これらの部分に対する需要は必ずしもつねにこれらを市場へもたらすのに使用されなければならない労働に支払い、またその資材をその通常の利潤とともに回収するに足る以上に大きな価格を生ずるものだとは限らない。³⁹⁾」(傍点は筆者)というように輸送費部分を労働に対する余分な投入部分として代替させているのである。

次に地下資源である石炭や金属の場合をとりあげ、まず炭坑については位置よりも多産性が地代を成立させる条件であるとしている。ただそのさい多産的な坑山であっても位置が不利であるときには地代は成立しない⁴⁰⁾と付しているが位置は二義的にとらえられている。さらに金属鉱山についてはその「価値が非常に大であるから、一般に非常に遠距離の陸上輸送やもっとも遠距離の海上輸送の経費を負担できるほどである。⁴¹⁾」ゆえに、地代の成立はその多産性に依拠しているとしている。このような表現はきわめて経験的であり、輸送費の概念が原文では the expence of a very long land, and of the most distant sea carriage⁴²⁾と具体的な輸送内容を記述するに留っており、抽象化されていない。炭坑あるいは金属鉱山の位置とその生産量との代替関係が明白に認識できなかったためであるといえよう。多産性を結論づけるためには彼の原理にしたがえば位置と生産量を労働に置換する作業からまず始められなくてはならないことになる。

以上のように地代の成立条件は需要に支えられて成立する価格の高さと、その価格の及ぶ広がり、すなわち市場圏の中にその生産地が包含されるかどうかということである。そのさい生産地の位置と多産性が問題になるが、これは輸送費を媒介として説明されるべきものである。しかし彼の輸送費概念は未成熟であるがゆえに、各生産物の地代の成立条件は経験的に述べられることとなったのである。

(3) 地代の空間配列

次に前者のつねに地代を生ずる土地生産物の場合についてみてみよう。この場合には食料生産すなわち農業生産がその対象となる。なぜつねに地代を生ずるかについてはすでに触れた。そこで問題は一步すすんでそのさい地代はどのような差異を生じ、どのように空間に配列するのかということである。これを検討することはまさに彼の空間認識を直接的に把握することにつながろう。

i) 地代の空間的差異

まず地代の差異が生ずることについては「土地の地代はその生産物がおよそどのようなものであろうとも、その多産性にともなって差異を生じるばかりではなく、その多産性がどのようなものであろうともその位置によっても差異を生じる。⁴³⁾」と述べ、土地の肥沃度およびその位置に関連して差異が生じることをあげ、とりわけ位置が大きなきめ手になることをあきらかにしている。

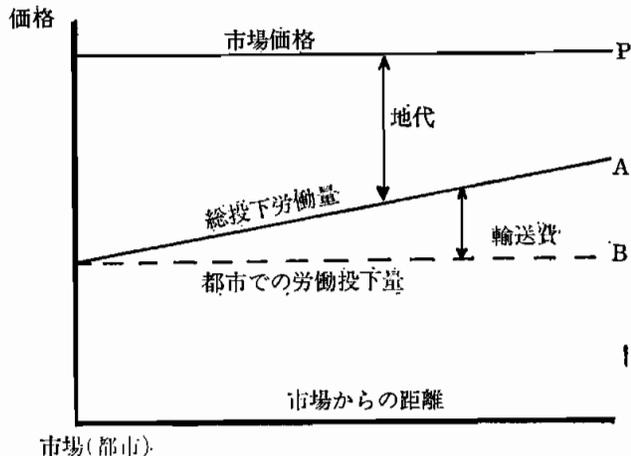
したがって具体的にそれがどのような差異となってあらわれるかについてもこの位置が機能することにより「都市の近隣の土地はいなかの遠隔地方にある同等に多産的な土地よりもいっそう多くの地代をもたらす。⁴⁴⁾」と、都市を中心にした地代の配列の原理を指摘しており、空間におけるその規則性の存在を認めている。

そしてこのような規則性がなぜ生ずるかについては「前者を耕作するには後者をそりするよりもいっそう多くの労働が費されるわけではないが、遠隔地の生産物を市場へもたらすのはつねに一層多くの労働が費さざるをえない。それゆえ一層多量の労働がこの生産物で維持されざるをえないし、そこで農業者の利潤と地主の地代の双方がひきだされるその剰余も縮減されざるをえない。……(それに)いなかの遠隔地方での利潤率は……一般に大都會の近隣でよりも高い。⁴⁵⁾」(文中の傍点およびカッコ表現は筆者)」という説明からうかがわれる。文中の傍点部分はあきらかに

輸送費を労働に代替した表現であり、前にふれたように輸送費概念の代替性をくりかえしたものである。これをどのように表現したらよいか。それを図(第1図)によって示してみよう。

図中において都市近隣で

の労働投下量を点線Bであらわすと、総労働投下量Aは輸送費の代替部分を含むために都市からの距離に比例的に増加することを示している。ただし、便宜上それを直線であらわすことにした。したがってAとBとの差は農村から都市に対する輸送費部分を意味することになる。ところで一物一価の形成は都市で行なわれ、その市場価格は全城(国)に及んでいる。このような認識は古典学派にかなり共通するが、中世的都市と農村との関係においてはきわめて一般的なことであり、その残影の中にあつた当時においてこのような発想をしたのは当然であつた。フォン・チューネンがこのような前提条件を設定したのも偶然の一致ではない。そこで図中に市場価格Pを記入すれば $P - A$ が実際の地代として示される。この場合都市からの距離につれて地代が減少しているのは当然となる。彼はそのさいさらに利潤率の高さが遠距離ほど高くなるために、地代は遠距離においてさらに減少するとしている。しかし、この点については彼自らが別の章で「どのような事業を営むにし



第1図 (Fig. 1) 地代の変化

でも、一般に大都會の方がいなかの村でよりもいっそう大きな資材を必要とするものである⁴⁶⁾」としており、経営の集約度が明らかにならない限り利潤の絶対額にそのような規則性が生ずるかどうかは不明確であり、ことさら利潤率の地域差を付加する必要はないように思われる。しかし以上のような形で図化することにより地代が一定の規則性をもって配列することが示唆できる点は十分に注目されなくてはならない。

ii) 地代の空間的配列

では具体的にはその規則性にしたがってどのような土地利用形態が配列することになるのであろうか。

これについては前節で炭坑の地代に触れたが、それに関連して次のような指摘を行っている。すなわち、当時の石炭はよりすぐれた燃料である木材に代替する形で使用されていた。したがって石炭価格は木材価格に追いつくことはあっても上回ることにはなかった。ところがこの木材は耕地の拡大につれて払底傾向を示し、植林をすることにより植林地に地代が成立することになった。しかしその地代も穀物地代と同一の高さを実現することはできるが、それを上回ることにはない、⁴⁷⁾というように市場価格をテコとして各生産事象の均衡関係を一元的に説明している。そこでは明白なる空間関係は述べられていないが、土地利用の空間関係の存在を示唆していることを読みとることができる。

したがって農業生産の空間配列についても同じような原理から説明される。具体的な農業生産の土地利用形態としては穀物畑、改良された放牧地、荒れた放牧地がとりあげられている。そこでまず中位の多産性を有する穀物畑は同一面積の最もすぐれた放牧地よりもはるかに多量の人間の食物を生産することから、穀物畑の地代は他の条件が同一であるならば最も高く成立することになる。ところがそれゆえに耕地面積が拡大することによって放牧地が減少し、その結果屠肉需要は相対的に増大してその結果放牧地の地代も上昇することになり、このような過程はそれまでの歴史が示してきたとしている。したがって「改良の進歩にともない、荒れたままの放牧地の地代や利潤によってある程度まで規定されるようになり、この後者の利潤や地代はさらに穀産地の地代や利潤によって規定されるようになる。⁴⁸⁾」

かくして、たとえば荒れた放牧地の地代を R_1 、改良された放牧地の地代を R_2 、穀物畑の地代を R_3 とすれば、これらの間に

$$R_1 = f(R_2)$$

$$R_2 = f(R_3)$$

という均衡式が成立する形で示すことができる。これはこのような形での一元的に土地利用の配列が規定されることを示すものである。なおこの場合についていえば、地代は高い方から R_3 、 R_2 、 R_1 の順となり、第1図にしたがえば都市を中心にして R_3 — R_2 — R_1 の順に地代の配列がみられることになる。

ではこれらの地代の示している各土地利用形態はどのような範囲において成立することになるのだろうか。次にそれを検討してみよう。

まず R_3 — R_2 — R_1 の順に地代が配列することが明らかになったが、この場合には最高の地代を示す R_3 の土地利用が R_2 や R_1 の土地利用の範囲にまで結果としては拡大し、 R_3 の土地利用だけになってしまわぬかという問題がある。というのは彼が「……こういう土地の地代や利潤は、他のすべての耕作された土地の地代や利潤を規定する。もしある特定の生産物がこれらの食料よりもより少額の地代や利潤しか生じないならば、その土地はまも

なく穀物が牧草かのいずれかの生産にふりむけられるであろうし、またもし特定の生産物がこれ以上に多額の地代や利潤を生じるならば、穀産地または放牧地の一部がまもなくその目的のためにふりむけられるであろう。⁴⁹⁾と述べ、高い地代の土地利用へ低い地代の土地利用が転換することを示しているからである。かくしてまず最高地代の高さが決まる場合を考えると、下位の地代はより高い地代を生ずる土地利用へ指向することになる。しかしそのために最高地代を生ずる穀物畑の面積が増大するにつれ、下位の改良放牧地で生産される屠肉価格が上昇し、その地代も上昇するということが前に示されている。したがって上位の地代を示す穀物畑の地代は自らの面積が累加することによって価格低下をきたし、下位の地代を示す改良された放牧地の地代の上昇線と交又する水準まで下降し、そこで均衡することになる。それは第2図のC₁の点で示される。つづいて最も下位の荒れた放牧地の地代とこうして

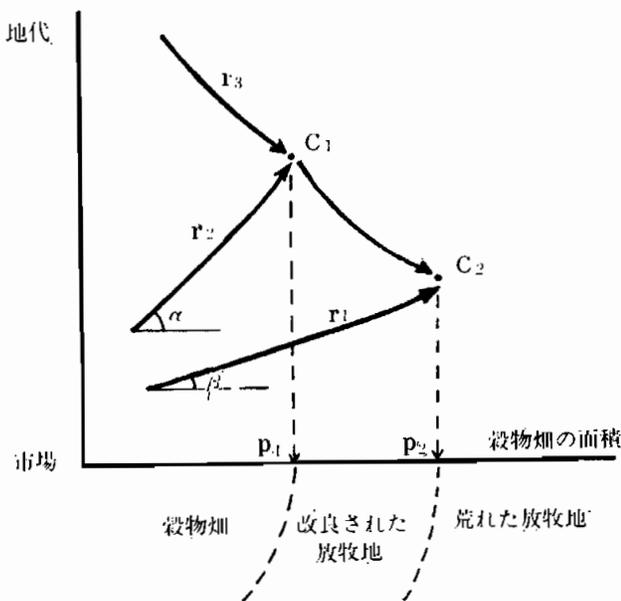
均衡したC₁とは同じような関係となり、第2図のC₂の点に収れんし、均衡が保たれることになる。そこが土地利用形態の境界を示す。そのさい改良された放牧地よりも荒れた放牧地の方が都市から遠隔地に位置するため輸送費を多く要する。したがって各地代の上昇角度は第2図に示されるようにαがβより大きくなり、荒れた放牧地の方が緩傾斜となる。この結果、同図の下半分のような形で土地利用が配列することになる。

ところでアダム・スミスは穀物畑の地代は増加

一途の人口に支えられて上昇傾向にあることを示唆している。これは彼の時代の経験に支えられた条件であったといえよう。それゆえ改良された放牧地の地代はより高い地代に指向し、穀物畑の地代に追いつきうるが上回ることはないという場合が考えられる。したがって各地代間には

$$R_3 > R_2 > R_1$$

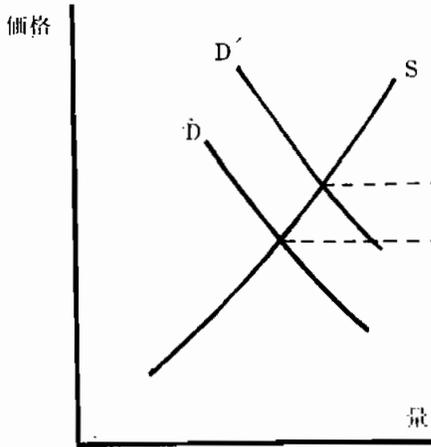
が成立することになる。さきにもべた土地利用の配列の場合は第2図に示されるようにC₁からC₂へと地代均衡を取れんさせる形で発展させることができた。今度の場合は土地そのものの改良も加わって最高地代がさらに上方へ変動する場合の土地利用の配列を把握することになる。このような思考はリカードによって差額地代論として受けつがれているといえるだろう。では土地利用の配列をどのように展開させたらよいのであろうか。主導的な地位にある最高地代の変動に対して土地利用の配列を動的に把握する必要がある。こ



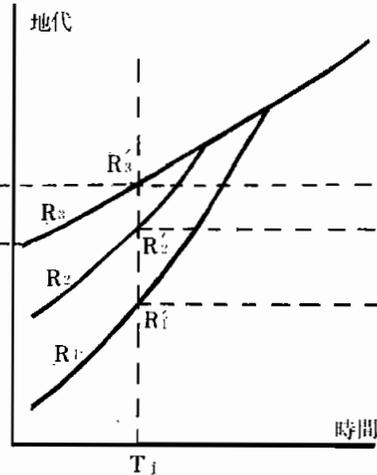
第2図 (Fig. 2) 地代の変化と土地利用の配列

(注) r₃: 穀物畑の地代
 r₂: 改良された放牧地の地代
 r₁: 荒れた放牧地の地代
 α > β > 0

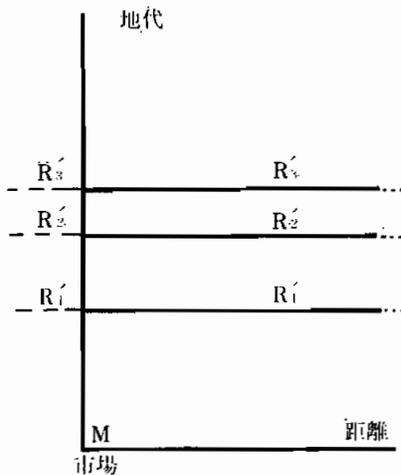
それを十分展開させるためには幾多の条件が明示されるに至っていないためにかなり困難であるが、このような動態的思考で土地利用の空間的配列を認識しようとした試みはきわめて先駆性に富んだものである。フォン・チューネンが静態的分析に終始したことからもわかるだろう。そこでそれを第3図において展開、発展させてみよう。



第3-1図 (Fig. 3-1) 需要の増加



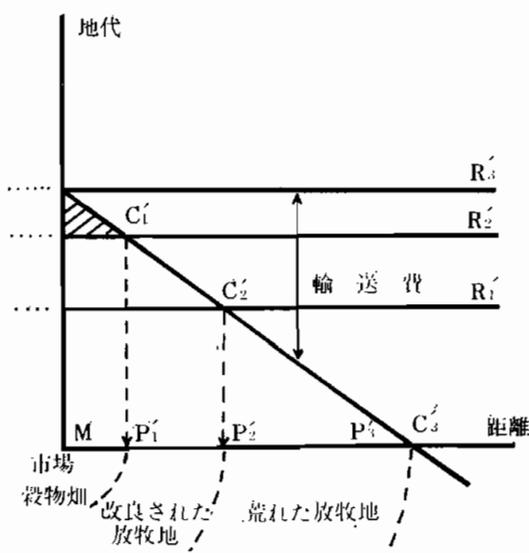
第3-2図 (Fig. 3-2) 各地代の増加



第3-3図 (Fig. 3-3) 各地代の大きさ

まず第3-1図は需要の増大にともなう穀物価格の上昇を示したものである。その結果穀物地代 R_3 は上昇する(第3-2図)。ところで R_3 の上昇に対しては R_2 が上昇し、 $R_3 = R_2$ の高さで均衡し、さらに R_1 が上昇し $R_3 = R_2 = R_1$ の高さで均衡する状態が理念的な構図として成立する(第3-2図)。しかし R_3 の限りない上昇は現実にそのような各地代を一致させることを実現せしめないであろう。そこで第3-2図におけるある時点 T_1 ——それは理念的な均衡点へ指向する一過程として理解できるが——における各地代の水準を求めると、同図においてそれぞれ R_3' 、 R_2' 、 R_1' で示される。しかもこの水準

は第3-3図において示すように全域にわたって成立する。この状態であれば R_3' が最高地代であり、各々の地代がそれに平行するため、各地代間の境界が定かでない。彼は各土地利用内部においてのちにフォン・チューネン⁵⁰⁾やチサム⁵¹⁾が指摘するような地代の差異にもふれていないし、もっと重要なことは各土地利用の経営集約度についても明らかにしていないことである。したがって、もとより地代をより具体的なものとして把握することはきわめて困難である。かくして各土地利用間の境界は概念的なものとしてとらえることしかできない。それを可能にするのが未成熟ではあるが第1図に示した輸送費部分を抽出して利用することである。労働の代替とした認識であれ、ここではその距離にともなう変化の仕方がわかればよいということである。かくして第3-3図の各地代のうち都市に最



第3-4図 (Fig. 3-4) 各地代と土地利用の配列

(注) 輸送費の変化は第1図にしたがう。

も近接している R_3 から輸送費部分を差引いたのが第3-4図に示される。この場合、第3-3図から輸送費部分を差引いた残りが真の地代ということになる。かくして第3-4図において、たとえば R_3' の地代の成立範囲は R_2' と輸送費線との交点 C_1' までの斜線部分となり、それを地表へ投影すると MP_1' の範囲となる。同様にして C_2' 、 C_3' が求まりそれに対応して $P_1'P_2'$ 、 $P_2'P_3'$ が実際の土地利用範囲として求まることになる。彼が動的な空間配置を示唆していたにもかかわらず、結局は条件不足によりその一面を静態的に把握せざるをえなかった。いずれにせよ、彼のいくつかの命題や条件を以上のように組立てることによ

って彼の土地利用に関する空間配列をより具体的に浮かあがらせることができた。このような空間認識は彼が強く影響を受けたチュルゴー⁵²⁾やケネー⁵³⁾においては見出されない。そして彼のあとを引継いだリカードにおいてもこのような形での展開はなされていない。そこに彼の地代論における独創性の芽をうかがうことができ、高い評価が与えられるべきだと思われる。もちろんこの空間認識はのちにフォン・チューネンがそれを中心な原理として体系化したように精緻で具体的な数字に裏付けられたものではない。しかし明らかにフォン・チューネンの展開する理論の原形をここに見出すことができるのである。かくしてアダム・スミスがリカードに受けつがれたと同様に、アダム・スミスとフォン・チューネンとの間に結ばれた太い糸を見出すことができる。

4. おわりに

以上、アダム・スミスの地代論を中心にして彼の空間認識を検討してきた。膨大な著書全体からみれば、空間認識に基いた原理は地代論を中心に若干みられる程度である。しかし、個々の事象をとらえる段階では空間認識を基調にした記述を随所に見出すことができる。というのは経済原理を説明するさいにきわめて多くの事例がとりあげられており、これに基づいて帰納的な説明を加えているからである。したがって、その限りにおいて現存する空間的諸制約を表現することになったということであろう。その意味では空間的認識が必ずしも統一されておらず、生のままの形で示され、それゆえきわめて副次的な原理として位置づけられるといえよう。

このような中で最も強く空間的な原理の表現されているのが地代論である。彼の地代概念は当初、利潤および労賃とともに価格を構成するものであったが、のちに地代は価格の結果生ずるものとし、結局土地の独占価格に基盤を置くこととなった。そしてこのような地代は都市からの距離と相関関係にあること、また各種の土地利用形態が最高地代を示す殺物畑地代の変化と函数的に変化し、しかも各々の土地利用が空間的な配列を示すことを

元的に認識しようとした。このような原理を示唆した点は高く評価されねばならない。なお筆者は彼の示したそれぞれの条件を考慮し、それらをもとにして第1図から第3図のような構図で地代の空間配列を具体的に表現した。また彼が地代を変化するものとして把握し、それゆえ各土地利用形態を動的に把握しようとした点は、のちのフォン・チューネンやアルフレッド・ウェーバーの経済立地論が静態的な分析であったことを考慮すればその先駆性を評価することができよう。これも個々の現実的な事象の解釈を帰納的に行おうとするものの結果であったろう。

しかし、それゆえに地代の空間配列を支える重要な原理にならねばならないはずの輸送費についての独立した概念はまだ未成熟で、きわめて個別的に把握されている。しかも彼の演繹的な論理の前提に基づいて輸送費の概念は労働で代替する認識をしている。この場合、労働の量あるいは質が各土地利用形態の中で客観化できない以上、それをそのまま輸送費に整合させ代替しつづけることには限界がある。そこに空間認識の先駆性とともな混乱を招く意味での限界を見出すことができる。

このようにみえてくると、チュルゴアの所論をより一層具体化したのがアダム・スミスであったとするならば、アダム・スミスの以上のような空間認識をより具体的に実証し、しかも演繹的な方法で表現したのがフォン・チューネンであったといえるだろう。その意味ではアイザードが従来を経済学を空間的認識が欠如していたとして一蹴したことは、古典派経済学の創始者であるアダム・スミスに関する限り性急であったといえる。

なお、アダム・スミスの地代が土地の独占価格から生起するものとして、それを土地の需給をめぐる効用概念で認識しようとした点は、今日におけるわが国の土地問題の認識にさいしても十分意義あるものと理解される。その意味でも今日の土地問題をあらためてアダム・スミスに戻って再構成してみる必要は十分あるように思われる。

注

1. M. L. Greenhut (1956) : Plant Location in Theory and in Practise. The Economics of space. (西岡久雄監訳 (1972) : 「工場立地, 理論と実際 (上巻)」 P. 3.
2. W. Isard (1956) : Location and Space Economy. General Theory Relating to Industrial Location, Market areas, Landuse, Trade and Urban structure. pp. 24~27. (木内信蔵監訳 (1964) : 立地と空間経済, pp. 25~29)
3. J. H. von Thünen (1826) : Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie. (近藤康男訳 (1943) : 農業と国民経済に関する孤立国)
4. A. Weber (1909) : Über den Standort der Industrien. (江沢譲爾監訳 (1966) : 工業立地論)
5. M. Chisholm (1966) : Geograghy and Economics. (村田喜代治訳 (1969) : 地域と経済理論, pp. 8~11)
6. A. Lösch (1939) : Die räumlich Ordnung der Wirtschaft. (篠原泰三訳 (1968) : 経済立地論)
7. 前掲2) および Methods of Regional Analysis : an introduction to Regional Science (1960) など.
8. 前掲2)
9. A. Marshall (1890) : Principles of Economics.
10. J. A. Schumpeter (1954) : History of Economic Analysis, p. 465 (東畑精一訳(1957) : 経済分析の歴史 3. p. 982)

11. 前掲3) 訳, p. 12, 13, 16.
12. その数少ない例として高橋潤二郎(1961): 経済活動の地理的側面に関する古典学派の諸説, 三田学会雑誌, 54巻5号, がある。ここでは A. スミス, D. リカード, J. S. ミルの所説の概観がなされている。また前掲5)で M. チサムも A. スミス以下の空間認識が欠如しているという主旨でごく簡単にふれている。
13. アダム・スミス著, 大内兵衛・松川七郎訳(1959): 諸国民の富, 岩波文庫版。これはキャナン版(1930)を台本にしている。
14. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* by Adam Smith, LL. D. reprinted from the sixth edition, with an introduction by William Robert Scott, 1925.
15. J. A. Shumpeter (1954): *History of Economic Analysis*, p. 367, pp. 374~376. (東畑精一訳(1956): 経済分析の歴史, p. 772, pp. 789~791)
16. M. Blaug (1962): *Economic Theory in Petrospect*. (久保芳和, 真原一男, 杉原四郎訳(1966): 経済理論の歴史, p. 78)
17. E. James (1950): *Histoire Sommaire de le Pensee Ecomique*. (久保田明光・山川義雄訳(1965): 経済思想史(上), p. 110)
18. D. Ricardo (1817): *On the Principles of Political Economy and Taxation*.
19. 高島善也(1968): アダム・スミス, p. 8.
20. 前掲 13) (一) p. 90.
21. 前掲 13) (一), p. 102.
22. 前掲 14) I, p. 7.
23. 前掲 13) (一) p. 124.
24. 前掲 13) (一) pp. 125~126.
25. 前掲 13) (一) pp. 124~125.
26. 前掲 13) (一) pp. 419~500.
27. 前掲 13) (一) pp. 189~190.
28. 前掲 13) (一) p. 191.
29. 前掲 13) (二) p. 7.
30. 前掲 13) (二) pp. 8~9.
31. 前掲 13) (二) p. 9.
32. 前掲 13) (二) pp. 10~11.
33. 高島善也(1964): スミス「国富論」, p. 77.
34. 前掲 13) (二) pp. 11~12.
35. 前掲 13) (二) p. 42.
36. 前掲 13) (二) pp. 43~44.
37. 前掲 13) (二) p. 45.
38. 前掲 13) (二) p. 45.
39. 前掲 13) (二) p. 48.
40. 前掲 13) (二) pp. 48~49.
41. 前掲 13) (二) p. 54.
42. 前掲 14) p. 175.
43. 前掲 13) (二) p. 13.
44. 前掲 13) (二) p. 13.
45. 前掲 13) (二) p. 13.
46. 前掲 13) (一) p. 272.

47. 前掲 13) (二) pp. 50~51.
 48. 前掲 13) (二) p. 17.
 49. 前掲 13) (二) p. 23.
 50. 前掲 3).
 51. M. Chisholm (1966) : Rural Settlement and Land Use.
 52. A. R. J. Turgot (1766) : Réflexions sur la formation et la distribution des richesses.
 (永田清訳 (1934) : 富に関する省察)
 53. F. Quesnay (1758, 1759, 1760) : Tableau Économique. (戸田正雄, 増井健一訳(1933)
 : 経済表)

Summary

The author's object is to examine the rent theory in "An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations" by Adam Smith, from the view point of the spatial recognition of it. The results obtained are as follows :

1. There are many economic geographical descriptions which seem to explain the actual examples of economic activities, but those are just to suit the occasion.

2. There are two products of land : one always affords rent, and the other sometimes does, and in other cases does not afford rent. The product of the former is food and that of the latter is clothing and lodging.

3. The condition which affords rent is whether the producing district is involved in the advanced frontier effected by market price which is supported by increasing demand, or not. But the concept of transfer cost is not enough to explain this principle. Adam Smith takes actually the input labour instead of the concept of transfer cost. So, the change of transfer cost shows the change of input labour with the distance from market (Fig. 1). Thus, We can recognize the rent gradient with the distance from market, which is shown in Fig. 1.

4. The author tries to show two kinds of way how to delimit the land use, based on that rent gradient. First is the case of the competition of each landuse. In this case, with the increase of the square of corn-field, the height of rent is stringent to C_1 which is the point of intersection of the decreasing line of the rent of corn-field and the increasing line of improved pasture, in the first stage. In the next stage, the height of rent is stringent to C_2 which is the point of intersection of the decreasing line of C_1 and the increasing line of the rent of unimproved pasture (Fig.2). Second is the case of successive rise of rent of corn-field which is supported by the increase of population (Fig. 3-1). In this case, each rent rises with time (Fig. 3-2), then, R_3 (rent of corn-field) is larger than R_2' (rent of improved pasture), and R_2' is larger than R_1' (rent of unimproved pasture)(Fig. 3-3). So, the zoning of each land use is shown in Fig. 3-4, in which the rent gradient is formed being crossed by transfer cost of one in Fig. 1.

5. Thus, we can find and recognize the spatial idea in the rent theory by Adam Smith, and he is found to be the pioneer leading to the location theory of agriculture by von Thünen.